

『マクベスの悲劇』の唯一の喜劇性

—『マクベス』の四幕三場—

清水 英之

『マクベス』の正式題名は、*The Tragedie of Macbeth*、『マクベスの悲劇』であり、1623年出版のThe First Folioの題名である。マクベスは悲劇なのであるが、これは主人公が魔女たちに誑かされ死ぬ結末になる筋に人間の悲しさが感じられるからであろうか。筆者がこれまでに鑑賞してきた『マクベス』にはことさら人間の愚かさや醜さが強調されていたように感じられた。そのような『マクベス』の劇や映画であまり感動したことがないのは筆者の芸術的鑑賞眼がないからであろうか。

シェイクスピアが『ジュネーヴ聖書』の愛読者であったという事実を筆者が知ったのはつい最近のことである。聖書という観点から悲劇の中の喜劇性に注目し『リヤ王』と『ハムレット』を見直す論を以前執筆した¹。今回、『マクベス』においてもその観点から見直してみたいと感じたのがこの論の執筆の動機である。また、『マクベス』の何が悲劇なのかをもう一度確認し、偉大な劇作家シェイクスピアが我々に残した『マクベス』には、どうしてもなく感動できる要素が隠されているのではないかという疑問に筆者なりの解答を出すことがこの論の目的である。

この論では、最初に、悲劇の定義を確認し、主人公マクベスの悲劇について再確認してみたい。次に、悲劇『マクベス』がより感動的な上演になるような演出論を提案してみるつもりである。その結果、悲劇『マクベス』の筋書に注目することによりこの劇が喜劇で終わる可能性を指摘してみたい。

第1章 『マクベス』の悲劇について

『マクベス』を悲劇であると最初から疑わずに演出した結果、愚かな人間の無意味な人生を確認させられ、それこそ「なんの意味もない」という決め台詞で観客は納得させられてしまいそうである。筆者の恩師、野町二（すすむ）博士なら『マクベス』がな

¹ 「悲劇『リヤ王』の唯一の喜劇性について」, 学習院女子大学紀要第20号, 2018.

「悲劇『ハムレット』の唯一の喜劇性—イエス・キリストへの敬信とハムレットの迷い—」, 学習院女子大学紀要第21号, 2019.

ぜ悲劇なのかを分かり易く説明するのが研究者というものだよ」と叱咤激励の声をかけてくださることだろう。この章では、筆者自身がマクベスの悲劇を確認し、その認識をより一般的に認めていただくためにも『マクベス』の悲劇について考察し、その定義を明らかにしてみたい。

1-1 悲劇の一般的な定義について

筆者の記憶では筆者が悲劇の定義を学んだのは学生時代で、アリストテレスの『詩学』からであった。今日の悲劇の定義について調べてみようという便利なウィキペディアを見ると、「多くは主人公となる人物の行為が破滅的結果に帰着する筋を持つ」という特質と「悲劇には単なるハッピーエンドに終わらない劇という以外、悲劇の厳密な定義はない」と説明されている。これからマクベスの悲劇を論じようとするのに悲劇の定義が示されないのでは議論ができない。ゆえに、ここでは、古いと批判されても明確に悲劇を定義しているアリストテレスを参考にせざるをえない。それは、もちろんカタルシスという用語で定義づけられている説明であり、悲劇とは「叙述形式ではなく、劇形式をとっている。憐憫と恐怖を引き起こす出来事を含み、それによってこうした感情の浄化を達成する」(in a dramatic, not in a narrative form; with incidents arousing pity and fear, wherewith to accomplish its catharsis of such emotions.)²という部分である。筆者は、この悲劇の定義に立ち返り、議論の土台となる悲劇の定義についてさらに考察したい。

1-2 提案したい悲劇の定義について

筆者が提案したい悲劇の定義は、「嫌なことが起こるのではないか」という予感が重要であり、その予感が現実になった時に感じられる「悲しみ、失望」といった感情を基盤とする。アリストテレスの説明における「憐憫と恐怖を引き起こす出来事」とは主人公が結果として行う最終的な行為と理解され、その行為によって予感が現実となり不安が去ることを「浄化」(カタルシス)と理解される。その点で先のウィキペディアの説明で参考になるのは「期待が大きく裏切られたり、順調に進んでいた中で突然大失敗や不慮の災害に見舞われたりすることを、「悲劇的」と言う事がある。(例) 悲劇的結末」³という解説である。

ウィキペディアのカタルシスの説明には「アリストテレスは、『詩学』内で悲劇の効用としてカタルシス論を展開し、効果のひとつとしてカタルシスに言及するが、これが劇中の出来事ないし劇中の登場人物についていわれるのか、それとも観客についていわれるのかについては、明確に言及しておらず、諸説ある」⁴と説明されている。この疑問

² 『アリストテレス詩学』, 笹山隆訳注, 研究社, 1968, p. 19.

³ Wikipedia, <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%82%B2%E5%8A%87>.

⁴ Wikipedia, <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%82%B9>

については、この論では、カタルシスは観客の心理に起こると明確に定義しておきたい。筆者は、そもそも、劇とは見ている観客の心の中で生じる現象と理解しているし、劇を読んでいる読者の心理に働きかける現象としか考えていないからである。観客や読者の心の中で何も起こらないのであれば、どんな上演であろうと、悲劇など起こっていないと考えるべきであろう。

以上の考えにより、この論では、以下のような悲劇の定義を提案したい。「悲劇とは、観客が主人公の行動を見ながら嫌な結果を予想し、最終的にその予想が現実になるのを見せられ、悲しみや失望を感じること。」この定義を土台に、以下、マクベスの悲劇を理解してみたい。

1-3 主人公マクベスに対する観客の予感

アリストテレスは「悲劇はその本質において、人間の模倣ではなく、行為と生、幸福と不幸の模倣である。人間のすべての幸福もしくは不幸は、行為の形であられる」と言っている。また、「悲劇の目的はその中の行為、すなわちその筋である。そして、目的こそ何事においても、最も重要なものなのである。のみならず、行為なくしては悲劇は成立し得ないが、性格を抜きにしても悲劇は成り立ち得るであろう」とも言っている。この点に注目し、これから、悲劇を成立させるために、どのような行為の展開を観客が見せられるのかを検討してみよう。

(1) 魔女の登場

「われら三人いつまた会おうか？」という三人の登場人物たちの台詞で『マクベス』は始まる。しかし、いつの段階で彼らが魔女だと観客に分かるのだろうか。それは「灰色の牝猫 (Graymalkin)」「ヒキガエル (Paddock)」という動物の名前を語られた時、そして「霧と汚れた大気の中を飛び回ろう (Hover through the fog and filthy air)」という情報が観客の耳に入る時であろう。有名な「キレイはキタナイ」という台詞で魔女だと分かるかどうかは疑わしい。しかし、彼らの台詞で最も重要な情報は「マクベスに会う」(to meet with Macbeth)である。この台詞により観客は魔女たちとマクベスの出会いを予想することになる。

(2) マクベスの活躍

一幕二場は、突然、ダンカン王たちの登場となる。おそらく観客の予想に反してマクベスの登場は引き延ばされる。この場面は、上演では適当にカットされることが頻繁になっているが、マクベスを知る情報が満載である。以下に見逃せない台詞を引用してみよう⁵。

⁵ 英文の引用は全て、*Macbeth* (沢村寅二郎訳注、研究社新訳注双書、1984)による。日本語は全て筆者訳。

Dun: Dismay'd not this
Our captains, Macbeth and Banquo?
Ser: Yes;
As sparrows eagles, or the hare the lion.
If I say sooth, I must report they were
As cannons overcharged with double
cracks, so they
Doubly redoubled strokes upon the foe:
Except they meant to bathe in reeking
wounds,
Or memorize another Golgotha,
I cannot tell.

Ross: From Fife, great king;
Where the Norway banners flout the
sky
And fan our people cold. Norway
himself,
With terrible numbers,
Assisted by that most disloyal traitor
The thane of Cawdor, began a dismal
conflict;
Till that Bellona's bridegroom, lapp'd in
proof,
Confronted him with self-comparisons,
Point againt point rebellious, arm 'gainst
arm,
Curbing his lavish spirit: and, to
conclude,
The victory fell on us.
Dun: Great happiness!

ダン：それは我が大将たち、マクベスと
バンコーを狼狽させたであろう？
士官：ええ、
雀が鷲を、ウサギがライオンを狼狽さ
せる程度に。
真実を申せば、彼らは、倍の威力で轟
く大砲のように、
敵に倍の打撃を加えました。
傷から滴る血を浴びるおつもりか、
もう一つのゴルゴタの丘を記憶に残す
おつもりか、
私にはそうとしか言いようがありません。

ロス：ファイフからです、大王様。
そこではノルウェーの軍旗が空を愚弄
しており、
我が民の肝を冷やしております。ノル
ウェー王自らが、
恐ろしい数の兵士を伴い、
あの最も不実な反逆者、コーダーの領
主に
支援され、陰気な戦いを始めましたが、
とうとう、あの戦いの女神ペローナの
夫が甲冑に身を固め、
互角に奴に立ち向かい、
反逆の剣には剣をもって、腕には腕で、
奴の意気盛んな心を挫き、結果、
勝利は我々のものになりました。
ダン：何という幸せであろう！

以上の台詞で、敵にノルウェー王が加わった時、マクベスとバンコーが敵軍をものともせず一層太刀をガチガチと振るい、傷から滴る血を浴びるかのようには闘ったことが観客に知らされる。さらに印象に残る台詞は「ゴルゴタの丘」というイエス・キリストの血

を連想させる表現であろう。また、マクベスは戦いの女神「ペローナの新郎」という神格化された表現で彼の武勇が語られる。観客は、ダンカン王の「何という幸せよ」という台詞により「英雄」マクベスを受け入れる心の準備が整う。

(3) 魔女の予言

一幕三場になり、また魔女たちが登場する。魔女たちの最初の台詞も上演ではカットされがちであるが、魔女の一人が「夜も昼もあいつの庇のような臉に眠りは蓋をしないだろう」(Sleep shall neither night nor day/ Hang upon his pent-house lid;) という嫌な事を予感させる台詞を言う。そして、ようやく英雄マクベスの登場となる。彼の初めの台詞は「雨かと思えば晴れる、こんな日は見たこともない」(So foul and fair a day I have not seen.) である。この台詞で観客は一幕一場で聞いていた魔女の「キレイはキタナイ」(Fair is foul) という台詞との共鳴を感じ、魔女の呪いがもうマクベスに影響を与えていると予感できる。しかし、日本語の上演では魔女たちの台詞は従来から「キレイはキタナイ」と訳され、マクベスの台詞は「ひどいのか良いのか」(松岡和子訳) や「これほど汚くてきれいな日」(河合祥一郎訳) と苦心して訳されているが、“Fair is foul”を神秘的に解釈しては日本人には馴染みのない表現になってしまうだろう。むしろこの表現は天気表現であり、魔女の台詞を「晴れかと思えば雨」と解釈する⁶ことによってマクベスの台詞と日本語レベルで共鳴させられると主張したい。上演では、この台詞の意味の一致により魔女の魔力とマクベスへの影響が印象づけられるならば観客に「嫌な予感」を与えることができる。

魔女たちと出会ったとき、マクベスはあまり台詞を語らずバンコーの台詞の方が多い。これはマクベスが英雄であることを観客に印象づけることができる。英雄は言葉少なく内容が重厚に見える方がよい。その英雄に対する魔女の台詞は周知の通りである。ここで、注目したいのは「やがて王になられるお方」(that shalt be king hereafter!) という台詞に対する「おや、君、なぜびくっとするのは。こんなに耳に心地の好い事を怖がるみたいに」(Good sir, why do you start; and seem to fear/ Things that do sound so fair?) というバンコーの台詞である。「びくっとする」「怖がる」というマクベスの心理をわざわざバンコーから聞き、観客の嫌な予感が増す可能性に注目したい。そしてこの後、マクベスの葛藤が独白の形式で観客に語られることになる。

(4) マクベスの葛藤

魔女たちの予言の直後に、ロスとアンガスが登場しマクベスを賛美し彼をますます英雄視する。その賛美の台詞は「英雄」と「殺害妄想」の葛藤を強めるために重要な台詞であるのに、極端な上演ではいきなりアンガスの「我々が派遣されたのは……」ロス「よ

⁶ 英語の現実的な用法として“fair”と“foul”が天候を意味しているという説は、学習院大学時代の英語学の恩師藤原博先生の論文による。先生は英語学者の立場から一幕一場を考察し、この場面が天候に左右されていることを根拠に“fair is foul”が狐の嫁入りを思わせる天候を意味していると強調された。筆者はその論文を紛失してしまい、引用箇所を明示できないのが残念である。

り偉大な栄誉の手付けとして、あなたをコーダーの領主とお呼びするよう陛下から仰せつかったからです」と言わせてしまう演出が多い。そしてこの予言を実現する台詞からマクベスの葛藤が始まる。

しかし、ここで注目したいのはマクベスの葛藤が語られる直前のバンコーの台詞である。

<p><i>Ban:</i> That trusted home Might yet enkindle you unto the crown, Besides the thane of Cawdor. But 'tis strange: And oftentimes, to win us to our harm, The instruments of darkness tell us truths, Win us with honest trifles, to betray's In deepest consequence.</p>	<p>バン：あれは、心底信じられると、 コーダーの領主のみならず、 あなたを王位に駆り立てるかもしれない。しかし、奇妙なことだ。 よくあることだが、我々を誘惑し酷い 目にあわせるために、 闇の手先たちが我々に真実を語り、 取るに足らぬ本当のことを信じさせ、 最後の最後で裏切ることがある。</p>
---	--

「闇の手先どもが真実を語り、我々を誘惑し酷い目にあわせる」という台詞は、マクベスがこれから悪魔の誘惑を受け試されるのかもしれないという懸念を観客に与える効果がある。この情報からキリスト教信者の観客なら悪魔とイエスへの誘惑が想起されて当然であろう。この誘惑を受けて英雄マクベスは悪魔の誘惑に勝てるのだろうか負けるのだろうか観客は心配する切っ掛けを与えられる。そして、この台詞以降、マクベスの心の迷いと葛藤を観客は独白により理解することになる。

マクベスの迷いと葛藤はハムレットの独白と共通性がある。マクベスの場合はダンカン王を暗殺するかしないかである。ここでマクベスの葛藤の対立する二つの要素を一幕七場の独白から理解してみよう。

<p><i>Macb.:</i> If it were done when 'tis done, then 'twere well It were done quickly: if the assassination Could trammel up the consequence, and catch With his surcease success; that but this blow Might be the be-all and the end-all here, But here, upon this bank and shoal of time,</p>	<p>マクベ：終わる時にこれが終わるのなら ば、さっさとやってしまうのが 良いだろう。もし、この暗殺が 一網打尽に結果を出し、彼の死とともに 成功を納めるならば。こうした打撃だけ が こうした時に肝心要となるのだろう。 しかし、ここで、時の流れのこの土手 と浅瀬で</p>
--	--

We 'ld jump the life to come. But in
these cases
We still have judgement here; that we
but teach
Bloody instructions, which, being taught,
return
To plague the inventor: this even-handed
justice
Commends the ingredients of our
poison'd chalice
To our own lips. He's here in double
trust;
First, as I am his kinsman and his subject,
Strong both against the deed; then, as
his host,
Who should against his murderer shut
the door,
Not bear the knife myself. Besides, this
Duncan
Hath borne his faculties so meek, hath been
So clear in his great office, that his
virtues
Will plead like angels, trumpet-tongued,
against
The deep damnation of his taking-off;
And pity, like a naked new-born babe,
Striding the blast, or heaven's cherubim,
horsed
Upon the sightless couriers of the air,
Shall blow the horrid deed in every eye,
That tears shall drown the wind. I have
no spur
To prick the sides of my intent, but only
Vaulting ambition, which o'erleaps itself
And falls on the other.

我々は来るべき人生に飛び乗ろうとするのだ。だが、こうした場合、我々は常にこの時点で審判を受ける。ただ血なまぐさい事を教えるだけで、教えられたことが回り回って画策した人間を損なうのだ。この公平な正義は毒を盛った杯の中身を己の唇に押し付ける。彼は二重の信頼でここにいる、まず、私は彼の親類であり、臣下であるから、この企てには二重に強い、次に、彼を持って成す側であるから、彼の暗殺者に対し扉を閉ざすべきで、自らナイフを握るべきではない。さらに、このダンカン是非常に穏やかな王としての機能を有し、これまで偉大な職務を果たしていることは明らかだ。彼の美徳は殺害という深い罪を咎め天使のように喇叭の舌で訴える。憐れみは、生まれたばかりの裸の赤児のように、一陣の風に股がり、目に見えぬ風の従者たちに股がる翼を持った天童のように、恐ろしい行為を呪い、全ての目は涙で風をずぶぬれにするだろう。私には自分の意志に拍車をかける何の動機もない、ただ思い上った野心だけだ。勢い余って向こう側に転落だ。

上記の台詞でマクベスが失いたくない要素が三つある。一つは、「信頼」(“trust”)、それも二重の信頼である。二つ目は、ダンカン王その人である。なぜなら、彼を描写する16～25行目までで10行も用いてマクベスはダンカンの美徳を賛美している。そのダンカン王の神聖さ (like angels) と比較すれば、マクベスには優る要素はなく、ただ「思い上がった野心」(“Vaulting ambition”) しかないと告白している。マクベスはダンカン王を失いたくないと解釈できる。三つ目は、まさに「思い上がった野心」である。そして、この台詞により、悪魔によるイエスの誘惑と同じ内容の誘惑でマクベスが葛藤していることが分かる。ダンカン王を殺せば、「あなたを国の支配者にできる」とマクベスの心の中の悪魔が囁く。マクベスは悪魔の誘惑を退けるのか乗ってしまうのか、それが観客にとっても問題となる。

1-4 マクベスの行為と観客のカタルシス

マクベスは始終びくびくしながらも、妻の激励もあり殺害を実行する。ここで、観客の疑問を納得させるために(観客が疑問を抱けばの話だが)二つの疑問に注目したい。

一つ目は、なぜ妻にあのような説得力があるのだろうかという疑問である。英雄かつ義人であるマクベスがなぜ妻の悪への誘惑を受け入れてしまうのか。彼女こそ、実は、魔女なのだというような解釈は面白くない。筆者は納得のゆく解釈を提示し、そのような演技を役者に工夫してもらいたい。マクベス夫婦の台詞を見てみよう。

マクベスは手紙の中で「我がもっとも愛しい偉大な妻」(“my dearest partner of greatness”)と述べている。また、妻は「ミルクのような人間的優しさに溢れている」(“full of the milk of human kindness”)と言って夫の優しさを観客に意識させる。マクベスは妻との再会の第一声で「愛する私の妻」(“My dearest love”)と呼びかけている。一幕七場でマクベスが計画を中止にしようと言われた妻は「これからはあなたの愛も酔いの所為だと思しましょう」(“From this time/ Such I account thy love.”)言い、真剣な愛を要求している。また、マクベスは誘惑を煽る妻の言葉を遮る際に、「お願いだから黙ってくれ」(“Prithee, peace”)と言い、命令形で遮っていない。このような夫婦の会話から二人は愛し合っているという印象を受ける。通常の解釈ではマクベス夫人を悪魔の手先のように扱っているが、筆者は、アダムとイヴの関係と関連させても良いのではないかと理解している。イヴは、その実が食べても害にならないと思えたから、事実を告げた蛇の誘惑に乗り、夫にも勧め神の命令を無視する行動をとったのである。愛する夫の希望を叶える支えとなることが妻の愛と解釈すれば、マクベスに対する夫人の説得力も違和感なく観客に伝わるのではないだろうか。

もう一つは、マクベスの殺害という行為により観客にカタルシスを与えるにはどうすべきかという疑問である。カタルシスは、マクベスの場合、ダンカン王を殺すべきではない、もしくは、そうして欲しくないという観客の気持が前提となる。そして、迷い

に迷った挙句にマクベスが観客の気持を見事に裏切って失望を感じさせることで観客の心理にカタルシスが達成する。その為には、先ず、ダンカン王が聖人君主であることをマクベスが認識していること、そしてマクベスには野心以外に殺害の理由がないことを述べている一幕七場のマクベスの独白を重要視する必要があるだろう。つまり、英雄マクベスには彼に優る君主であるダンカン王を殺害してほしくない観客に思わせる演出上の工夫が必要である。ここで、二幕一場のマクベスの独白を見てみよう。

Macb.: Is this a dagger which I see
before me,
The handle toward my hand? Come, let
me clutch thee.
I have thee not, fatal vision, sensible
To feeling as to sight? or art thou but
A dagger of the mind, a false creation,
Proceeding from the heat-oppressed brain?
I see thee yet, in form as palpable
As this which now I draw.
Thou marshall'st me the way that I was
going;
And such an instrument I was to use.
Mine eyes are made the fools o' the
other senses,
Or else worth all the rest; I see thee still,
And on thy blade and dudgeon gouts of
blood,
Which was not so before. There's no
such thing:
It is the bloody business which informs
Thus to mine eyes. Now o'er the one
half-world
Nature seems dead, and wicked dreams
abuse
The curtain'd sleep; witchcraft celebrates
Pale Hecate's offerings, and wither'd
murder,

マクベ：目の前に見えるこれは短剣か？
柄が私の手の方に向いている。よし、
お前を掴んでやろう。
駄目だ、不吉な幻想め、目に見えるよ
うに
手で触れられるのだろうか？もしくは、
単なる
空想の短剣なのか？熱に冒された脳から
投影される虚像なのか？
まだ見える、今抜こうとするこの短剣と
全く同じ形をしている。
お前は私が向かうであろう方向へ先導
する。
私を使うであろう道具なのだな。
私の目は他の感覚の道化にされている
か、
もしくは全ての感覚に匹敵するかだ、
まだお前が見える。
刃とその柄に血が滴って、
前はそうではなかった。そんな物があ
るものか。
血なまぐさい所行がこんな映像を
私の目に送るのだ。今、半分の世界では
自然が死んだように思え、邪悪な夢が
目を閉じた眠りを苦しめる。魔術が
青ざめた魔女の供物を讃え、びくつく
人殺しは、

Alarum'd by his sentinel, the wolf,
 Whose howl's his watch, thus with his
 stealthy pace,
 With Tarquin's ravishing strides, towards
 his design
 Moves like a ghost. Thou sure and firm-
 set earth,
 Hear not my steps, which way they walk,
 for fear
 Thy very stones prate of my whereabouts,
 And take the present horror from the
 time,
 Which now suits with it. Whiles I threat,
 he lives:
 Words to the heat of deeds too cold
 breath gives.
 [A bell rings.
 I go, and it is done; the bell invites me.
 Hear it not, Duncan; for it is a knell
 That summons thee to heaven or to hell.
 [Exit.

見張り役の狼の鳴き声で、
 警戒しながら、こうして抜き足差し足、
 女を寝取りに行くように、目的に向かって
 て
 亡霊のごとく動く。固く頑丈な大地よ、
 私の足が歩く、その足音を聞くな、
 踏みしめる石が私の居場所をべらべら
 と告げ、
 今こそ相応しいこの時に、この瞬間の
 恐怖を
 味わうことがないように。私が脅して
 いる間は、彼は生きている。
 言葉は行為の熱気に冷た過ぎる息を吹
 きかける。
 [鐘がなる
 行くぞ、さあ、やるのだ。鐘の音が私
 を招いている。
 ダンカン、音を聞くなよ。それは、あ
 なたを
 天か地獄かに呼び出す弔いの鐘だ。
 [退場

上記のマクベスの台詞で観客は彼の精神が病んでいるのではないかと思うであろう。それは「見えるけれども触れない」(“I have thee not ... sensible/ To feeling as to sight?”)短剣によりマクベスが幻覚を見ていることが分かるからである。マクベスが「熱にやられた頭から生じる虚像なのか」という理性的な判断も語るので、観客はその迷いが極限状態であることを理解し、魔術に操られてゆく哀れな英雄の姿を見る。そして、やはりマクベスはダンカン王を殺害するだろうと強い懸念を感じる可能性がある。そして舞台から去ったマクベスが再び登場し、夫人の「あなた(我が夫) (“My husband!”)という呼びかけに、「俺はやったぞ (“I have done the deed.”)と答える。このマクベスの返答には「愛するお前の期待に応えたぞ」という意味が含まれてもよいし、観客に「やりました」と報告してもよいだろう。どちらにしても、この台詞により観客の懸念は払拭され観客の心理にカタルシスという現象を生じさせたいものである。

1-5 主人公マクベスに対する観客の新たな予感

悲劇が「主人公となる人物の行為が破滅的結果に帰着する」という条件を満たす筋を持つのであれば、マクベスが死を迎える結果まで悲劇は達成しないのであろう。しかし、筆者がマクベスの死に感じる気持は悲しいとか空しいという感情ではなく、寧ろ安堵のような気がする。それは、もうマクベスにはこれ以上の狂人になってほしくないという願いが叶ったときの安心感なのではないだろうか。以下、マクベスの死に対し筆者が感じる安心感について考察してみたい。

(1) 新たな殺人の予感

マクベスはダンカン殺害後に苦しみ出すが、その中でも「マクベスは眠りを殺すぞ」(“Macbeth does murder sleep”)、「グラームスは眠りを殺した」(“Glamis hath murder'd sleep”)、「マクベスはもう眠らない」(“Macbeth shall sleep no more”)という幻聴の声は、これからのマクベスの心痛を観客に予感させる重要な台詞であらう。眠れないマクベスは三幕一場で67行もかけて暗殺者を納得させ、バンコー殺害を実行に移す。彼は「ダンカンは墓の中だ、人生の発作的な熱病を後にしてぐっすり眠っている」(“Duncan is in his grave;/ After life's fitful fever he sleeps well.”)、「ああ、心はサソリで一杯だ、愛しい妻よ」(“O, full of scorpions is my mind, dear wife!”)と眠れない苦しみを観客に語る。演出上では、彼の苦しみが続くかぎり不安は消えず、その不安を消すために殺戮を繰り返すのではないかという予感を観客の胸に生じさせたい。

(2) 殺戮の予感とカタルシス

マクベスが殺戮を繰り返すのではなかとという予感は、不安でもあり心配でもある。そして、観客は「そうならないでほしい」「マクベスに死んでほしい」という願望を抱く可能性がある。魔女の誘惑に乗せられてしまった哀れな英雄がこれ以上罪を犯さず、安らかな眠りを得て欲しいと思う観客の気持を醸し出すことが重要であり、マクベスの死によってカタルシスが達成される。しかし、そのカタルシスは四幕一場の「女から生まれた男には誰もマクベスを倒せない」(“none of woman born/ Shall harm Macbeth”)、また「マクベスはバーナムの森林が高いダンシネインの丘を登って襲って来るまでは決して征服されない」(“Macbeth shall never vanquish'd be until/ Great Birnam wood to high Dunsinane hill/ Shall come against him.”)という物の怪の台詞により引き延ばされる。それらの台詞により観客もまたマクベス同様に「マクベスは死なない」と思われるのである。だが、これらの呪文が見事に覆され、マクダフと一騎打ちになった場面で観客の願いは達成されカタルシスが生じる。そして、主人公の死によって悲劇『マクベス』のカタルシスが成立することになる。これでマクベスも安らかに眠れるという安心感を主人公も観客も感じられる結末にすることができる。

第2章 悲劇『マクベス』の喜劇性

『マクベス』の主役はマクベスであり、主人公を中心に魔女たちやマクベス夫人、そしてその他の登場人物たちが彼の悲劇を成就して行く。しかし、この劇には脇筋がある。それに気付かされるのは四幕三場の存在である。この場面の前半はほとんどカットされることが多く、王子マルコムとマクダフの会話は注目される事がめったにない。この章では、彼らの会話に注目し、悲劇『マクベス』の脇筋に焦点を当て、観客が最後に感じるであろうカタルシスの喜劇性について論じてみる。

2-1 四幕三場が観客に与える期待

マクベスが命じてマクダフ一家が惨殺される光景を見せられた後、観客は、イングランドの宮廷で王子マルコムとマクダフの会話を聞くことになる。マクダフはマルコム王子にスコットランドを救う為にマクベス討伐の決意を促す。そして、その二人の会話は139行にも及ぶ。その後、ロスが登場し、マクダフに降り掛かった不幸を知らせ、マクベス討伐の情熱が観客に伝わり四幕三場は終わる。この一場は結構長い。行数を調べると240行も使われており、実は『マクベス』の中で一番長い場面だということが分かる。二番目に長いのは、一幕三場（マクベスと魔女たちの出会い）と四幕一場（マクベスが魔女たちに会いに行く）の156行である。ここでの疑問は、なぜシェイクスピアはこの四幕三場に240行もかけたのであろうかという一種の違和感である。

四幕三場はただ長いだけなのだろうか。実際の上演ではカットされる部分が多い。筆者はシェイクスピアが何か重要なメッセージを伝えるために意図的に長くしたのではないかという疑問を抱いてみた。ここで、四幕三場の台詞を検討してみるが、紙面の関係で全部を引用することはできない。議論してみたい部分の台詞に限って検討したい。

「涙を流しお互いの悲しみを出しつくそう」（“Weep our sad bosoms empty”）とマルコムが言う。それに対し、「むしろ死を覚悟の剣を握りしめましょう」（“Let us rather/Hold fast the mortal sword”）とマクダフが決起を促す。しかし、マルコムはマクダフを信用していない。マルコムの台詞を見てみよう。

This tyrant, whose sole name blisters our tongues, Was once thought honest: you have loved him well. He hath not touch'd you yet. I am young; but something	あの暴君、彼奴の名だけは口にすれば舌 が腫れる、 奴も嘗ては誠実であった。あなたは彼を 慕っていた。 彼はもうあなたにとって重要ではなく なった。私は若造ですが、何か
--	--

You may deserve of him through me, and wisdom	彼にとって役立つかもしれませんがね。怒れる神をなだめるために
To offer up a weak poor innocent lamb	哀れな弱き無垢の子羊を捧げるのも
To appease an angry god.	賢明でしょう。

「怒れる神をなだめるために哀れな弱き子羊を捧げる」という台詞は旧約聖書の「息子を神の生贄にする」という神がアブラハムの信仰を試した場面が思い浮かぶだろう。つまり、マルコムはマクダフの真意を確かめていることが分かる。と同時に、この場面が一気に聖書の世界に引き込まれて行くことになる。「あなたの本性は、私の考えで変えることはできません。／最も輝かしい天使が墮落したのに天使たちは常に輝いています。」(“That which you are my thoughts cannot transpose: / Angels are bright still, though the brightest fell:”) というマルコムの台詞は、マクベスをルシファーに喩え、マクダフを天使に喩えながらも自分の疑いは消えないとマクダフに言っている。「希望を失いました」(“I have lost my hopes.”) というマクダフの台詞に応え、マルコムは言う。

Perchance even there where I did find my doubts.	まさにその希望だったのです、私の疑問は。そんなに心痛を舐めながらあなたは何故
Why in that rawness left you wife and child,	妻と子供を置き去りにしたのですか。
Those precious motives, those strong knots of love,	彼らはあなたの心を動かす大切な存在、強い愛の絆でしょ、
Without leave-taking? I pray you,	なぜ、別れも告げずに？いや、別に、
Let not my jealousies be your dishonours,	私の警戒心はあなたが不誠実だといっているわけではありません。
But mine own safeties. You may be rightly just,	私自身の安全のためなのです。私が何を考えようとも
Whatever I shall think.	あなたはまさしく正しい方なのでしょう。

妻と子どもに対する愛を犠牲にしてまで何故自分の所に来たのか、という問いかけは、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにはふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない」(マタイ伝2:37) というイエスの言葉を反映しているように思われる。しかし、自分を信じてもらえないマクダフには「血を流せ、血を流すがいい、我が祖国よ」としか応えられない。そして、マルコムに別れを告げ、こう付け加える。

<p>I would not be the villain that thou think'st For the whole space that's in the tyrant's grasp, And the rich East to boot.</p>	<p>その暴君が支配する全ての土地と おまけに豊かな東方の地を交換にしても あなたが思う様な悪党には私はなりません まい。</p>
---	---

このマクダフの台詞に、観客はイエス・キリストが悪魔の誘惑を退けた場面を思い起こすかもしれない。マクダフは悪魔の誘惑には乗らない気高さを観客に見せる。だからマルコムは「怒らないでください」と謝罪の気持ちを述べるができる。そして、ここからマルコムは自分がいかに王に相応しくないかという根拠をマクダフに浴びせかけ始める。その台詞を観客もマクダフと共に聴く。

<p><i>Mal.</i> It is myself I mean: in whom I know All the particulars of vice so grafted That, when they shall be open'd, black Macbeth Will seem as pure as snow, and the poor state Esteem him as a lamb, being compared With my confineless harms.</p>	<p>マルコ：それは私のことです。私には分 かっています、 この体の中にあらゆる個別の悪徳が接 木されているので それらが表に出て来たら、黒いマクベ スさえ 雪の様に奇麗に見えることでしょう。 哀れな祖国は、 私の止まる所を知らぬ害悪と比べれば、 奴を子羊と思うことでしょう。</p>
--	--

<p><i>Mal.</i> I grant him bloody, Luxurious, avaricious, false, deceitful, Sudden, malicious, smacking of every sin That has a name: but there's no bottom, none, In my voluptuousness: your wives, your daughters, Your matrons and your mails, could not fill up The cistern of my lust, and my desire All continent impediments would o'rbear That did oppose my will: better Macbeth Than such an one to reign.</p>	<p>マルコ：確かに彼は血にまみれ、 贅沢で、強欲、嘘っぱちの不実者、 気まぐれで、悪意に満ち、言葉になる あらゆる罪の 匂いがする。しかし、私の色欲ときたら 底が見えない、底なしだ。皆さんの妻、娘、 既婚者も生娘も私の欲情の樽を満たす ことは できないでしょう。それに私の欲望は、 私の意志に逆らう 全ての邪魔者を押しえつけるでしょう。 そんな人間が手綱を握るより マクベスの方が増してでしょう。</p>
--	---

- Mal.* With this there grows
In my most ill-composed affection such
A stanchless avarice that, were I king,
I should cut off the nobles for their
lands,
Desire his jewels and this other's house:
And my more-having would be as a
sauce
To make me hunger more; that I
should forge
Quarrels unjust against the good and
loyal,
Destroying them for wealth.
- マルコ：この色欲に伴って
私の最悪に乱れた気質には出血の止ま
らぬ
酷い物欲が大きくなります。私が王に
なったら、
領地を目当てに貴族たちの首をはね、
こちらの財宝、あちらの館を欲しが
るに違いありません。
持てば持つほど、刺激になり、
もっと欲しいと思わせるでしょう。善
良で忠実な者にも
難癖を付け、富み欲しさに、
彼らを破滅させてしまいます。
- Mal.* But I have none: the king-becoming
graces,
As justice, verity, temperance, stableness,
Bounty, perseverance, mercy, lowliness,
Devotion, patience, courage, fortitude,
I have no relish of them, but abound
In the division of each several crime,
Acting it many ways. Nay, had I
power, I should
Pour the sweet milk of concord into
hell,
Uproar the universal peace, confound
All unity on earth.
- マルコ：しかし、私には何もありません。
王に相応しい美徳がない。
正義とか真実とか、調和や安定、
寛大、忍耐、慈悲、謙虚、
忠誠、我慢、勇気、不屈の精神、
それらを全く持ち合わせていない。逆に
悪事には事欠かず
いろいろやっている次第です。いや
はや、私が権力を握ったら、
甘美な調和を地獄に投げ捨て、
世界の平和を怒鳴りちらし、
地上のあらゆる調和を打ち砕くこと
でしょう。

これだけの自己否定を浴びせられ、「ああ、スコットランドよ、スコットランドよ！」とマクダフは断末魔の声を上げる。そして、「このような人間が統治するに値するか？私は今言った通りの人間だ」というマルコムへの質問に対し、「統治するに値するかですと、生きるにも値しない！」と王子マルコムに彼の偽り無き気持ちを吐露する。そして、こう付け加える。

Thy royal father	あなたのお父上は
Was a most sainted king; the queen that bore thee,	まさに聖人君主であられました。おなたをお産みになったお妃は
Often upon her knees than on her feet,	立っているよりも祈りを捧げていることが多く、
Died every day she lived. Fare thee well!	死を忘れず毎日を生きておられました。
These evils thou repeat'st upon thyself	ご機嫌よう！
Have banish'd me from Scotland. O my breast,	あなたが繰り返し述べたご自分の悪事が私をスコットランドから追放しました。
Thy hope ends here!	おお、我が胸よ、 お前の希望はこれで尽きた。

観客はマクダフの台詞で、ダンカン王と王妃が敬虔なるクリスチャンであることを知られるのである。この台詞によって、マルコムとマクダフは悪魔の誘惑には乗らない人物たちとしてマクベスと際立った対立関係に発展するのである。観客はこの対立関係を意識化することにより、この劇が悪魔の誘惑に乗ってしまった人間とイエス・キリストの戦いであることを感じ取ることが可能となる。

2-2 魔女の予言が観客に感じさせる予感

四幕三場が「夜が明けぬ日は長いものだ」というマルコムの台詞で締めくくられ、観客は一気にマルコムの勝利を望むことだろう。しかし、観客には二つ気になる予言がある。それは、例の「バーナムの森」と「女から生まれた者」という呪文である。観客は、これら二つの呪文で不安と願望の葛藤に陥らされ、ドラマの展開に手に汗を握ることであろう。そして、これら二つの呪文が見事に覆されるとき、観客の不安は浄化され、望まれる大団円へと期待は膨らんでゆく。

2-3 マルコムの勝利とカタルシス

こうして、悲劇『マクベス』は再終幕を迎えるのだが、観客は悪が善によって滅ぼされることを期待している。『マクベス』の有名な「明日、明日、また明日」という台詞が語る人生の無意味さも善の勝利を期待するからこそ受け入れられるのではないだろうか。マクベスの悲劇をただ羅列して強調するだけの演出では観客から悲劇を受け入れる客観性を奪ってしまうと苦言を呈したい。悲劇だけを見せられたら悲劇を見るのが嫌になってしまうだろうと筆者は懸念している。それは、シェイクスピアの意図するところではない。むしろ、マルコム軍の勝利を願う気持が実現されて、観客の心理にカタルシスが起こってこそ、悪魔に乗せられた愚かな主人公を憐れみ、彼の悲劇に思いを馳せる

ことができるのではないだろうか。

結論

なぜシェイクスピアは四幕三場に240行もかけたのであろうかという違和感が悲劇『マクベス』を再考する切っ掛けであった。『マクベス』は悲劇なのであるが、主人公が魔女たちに誑かされ死という結末に陥るので悲劇の定義に当て嵌まるのであろうか。筆者がこれまでに鑑賞してきた『マクベス』は、ことさら人間の愚かさや醜さが強調されてあまり悲劇を感じるができなかった。シェイクスピアは『ジュネーヴ聖書』の愛読者であった。今回、『マクベス』においても聖書の観点から見直し、『マクベス』の何が悲劇なのかをもう一度確認しようとした。この論では、最初に、悲劇の定義を確認し、主人公マクベスの悲劇について再確認した。次に、悲劇『マクベス』がより感動的な上演になるように観客の心理にカタルシスを生じさせる演出論を提案しようとした。その結果、悲劇『マクベス』の筋書の四幕三場に注目し、この劇が喜劇で終わる可能性を指摘できたように思われる。勧善懲悪とはいうけれど、善が悪に勝つ望みが感じられてこそ主人公が愚かで憐れむべき人間だと観客は納得できるのではないだろうか。そして、主人公の死を見つめ人生の空しさを悲劇と名付け、受け入れることができるのだと思われる。悪魔の誘惑に乗ってしまった人間の人生には意味がないのだ。これで、偉大な劇作家シェイクスピアが我々に残した『マクベス』には、どうしようもなく感動できる要素が隠されているのではないかという疑問に筆者なりの解答を出すことができたと思われる。

(本学非常勤講師)